巻頭言

本稿執筆をお引き受けした時点では予想もしなかった「未曽有の大災害」，直接に被災された方々の苦しみを思うとき，いまできることは何かと自問するばかりである．「あの日」の二日前まで，私も仙台にいた．東北大学惑星プラズマ・大気研究センター主催の International Symposium on Planetary Science 2011（ISPS2011）に参加していたのである．

二日前の3月9日お昼過ぎ，震度4の地震が会場（東北大学片平さくらホール）を揺さぶった．その日までなら日本人の感覚でも大きく長いと感じる地震で，演者も話を中断し揺れのおさまるのを待ったほど．折しも将来木星探査計画に関する講演中で，「木星は太陽系で最も活動的な惑星であるから面白い」という導入で始められていた．揺れがおさまったとき，海外参加者の一人が "You just said Jupiter IS the most active planet in our Solar System!" と叫び会場の爆笑を誘ったが，内心は恐怖を感じていたであろう．実際，別の外国人は昼食時に「日本人は，まるでこれが毎日あることのように，平然としている」と驚きを隠さなかった．

私が9日夕方に仙台を発ったあとも，ISPS2011は「あの日」のお昼まで続いていた．終了後すぐに帰宅の途についた者はぶじ帰り着き，食事や議論などで仙台出発が遅くなった者は途中で足止めをくうこととなった．上で爆笑を誘った研究者は，あろうことか仙台空港で「それ」に遭遇したものの無事であった（時が経ったら，そのときの気持ちをたずねてみたいと思う）．幸いなことにISPS2011の参加者，東北大学のスタッフに人的被害はなかった．10日に行われた松島へのExcursionがなかったら，会の終わった11日午後に海沿いの景勝地を訪れ深刻な被害に遭う人も出ていたかもしれない．まさに間一髪だったのである．

複雑系をなす現代社会において，この余波が深く長く続くことは想像に難くない．被災地から遠くはなれた場所でも，産業活動や雇用に影響が出ていると報道は伝える．「神は乗り越えられる試練しか与えない」という言葉があるが，個人的にはそれは正しくないと思う（でなければ，年間3万人を越える自殺者が哀れ過ぎないか）．数多く遭遇する困難のうちで，克服することができ，それを通じて得るものがあった，そうしたものが「乗り越えられた試練」として記憶されるのではないか．いま，個人，家族，地域，そして国家まで，巨大な困難に直面している．将来これを「試練であったが，そこから多くのことを得た」と振り返ることができるようにしなければならない．

そのとき宇宙科学は，惑星科学は，その中にどう位置づけられるであろうか？

佐藤 毅彦（宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所）